

# 人生ハンド仏句

第40号

H. 17. 7. 1  
(毎月1日発行)

げしほうらく

夏至法楽

感動の一夜

住職 谷川寛俊

過日六月二十一日(火)、「夏至の夜」夜八時よりインド古典音楽の夕べ「夏至法楽」の名のもと、県内の若手アーティストたちが企画して真成寺本堂で約一五〇名の聴衆者にインド古典楽器が奏でる幻想的な音色を魅了した。

これは副住職の友人から、是非お寺の本堂で演奏してみたいとの思いで開催され、東京在住の一流の演奏家たちが弦楽器の「シタール」「タンプーラ」と、太鼓に似た「タブラ」をゆつたりと演奏、二時間半にわたる古典音楽が鳴り響いた。

特に圧巻は、第二部に登場した副住職が読経し、それぞれの演奏家たちが楽譜を持たないで、自らの感性で楽器を弾き、又女性のダンサーも入り混じっての正に異体同心の姿が

現れた。

聴いている我々も自然にその中に吸い込まれていくような錯覚を与える古典楽器とマッチした不思議な世界に溶け込まれていった。

そして十一時ごろに予定の時間をはるかに経過し、無事成功裡に終了し、その後、後片付け、夜明け近くまで反省会に花が咲き、演奏家の人達も、「今まで経験したことのない仏様との不思議な交流が感じられた。」との感想を聞かせていただいた。

特に翌朝五時のお勤めには、ほとんど徹夜の状態でありながら、太鼓の音で目が覚めたのか、本堂で一緒にお参りする姿があり、大変嬉しく思いました。大聖人のお言葉の中に「それ佛道に入る根本は信を以って本(もと)とす。

たとえ解(とんこん)も正見(しょうけん)の者也。たとえ解(とんこん)有れども信心なき物は、誹謗(ひぼう)闍提(せんだい)の者也。鈍根(どんこん)第一(だいいち)の須梨(じゆり)般特(はんたく)は智慧(ちゑ)もなく悟(さと)りもなし。只一念(しついつ)の信(しん)ありて普明(ふみょう)如来(にょらい)となり給(たま)う。」(法華題目抄)

編集・発行  
玉蓮山 真成寺  
編集部  
TEL・FAX (0765)22-2268  
メールアドレス  
kokorochanthk@ybb.ne.jp  
ホームページアドレス

<http://www.geocities.jp/sinjyoujitoyama108/>

つまり、いくら解(わか)りきった事を言っても信(しん)ずる心がなければなりません。自分の名前すら覚(おぼ)えることが出来なかつた為に須梨(じゆり)般特(はんたく)は信(しん)ずる心が人一倍強(つよ)かつた為(ため)にお釈迦(しやくか)様より普明(ふみょう)如来(にょらい)という名前(なまえ)を授(たま)けられた。それほどに信心(しん)と言うことは大切な事(こと)なのです。

そしてもう一つ驚(おどろ)いたことは、朝食(あさけ)後(ご)用事(ようじ)があつて本堂(ほんだう)へいつてみると、リーダー格(りーだーかく)の一人(ひとり)がご宝前(ごほうぜん)の正面(しょうめん)に座(ざ)つて静(しず)かに楽器(がくぎ)を弾(ひ)いているのです。泊(と)めていただいたお札(おま)に、と思(おも)つて弾(ひ)いているのか、或(ある)いは仏様(ぶつさま)に向(むか)つて自(みづか)らの気持ち(きもち)を訴(こ)えているのか、私の心(こゝろ)は両方(りやうほう)に受けとられました。一人の芸術家(げいゆんか)の生き様(いきさま)を見る思い(おもひ)が致(いた)しました。

若い人達(わかいひとたち)の心(こゝろ)にも仏様(ぶつさま)を敬(うや)まう素直(すなお)で真面目(まじめ)な気持ち(きもち)があるのだと、大変(たいへん)嬉(うれ)しく思(おも)つた次第(しだい)です。いずれにせよ、インド(いन्द)古典(こくわん)楽器(がくぎ)の持つ(もつ)て幻想(こうわん)的な靈氣(れいき)に包(つつ)まれた一夜(いちや)でした。



夏至・・・一年中で一番昼間(ひるま)がなが～い日(ひ)だよ!